

八雲立つ日本・出雲から陽が昇る シンポジウム「悠久の河」開催

11月20日、人間自然科学研究所は、シンポジウム「悠久の河」（参加者約200名）を開催しました。キーワードは「地方創生」、「女性が輝く社会の実現」。

劇団幻影舞台による朗読劇「悠久の河―周藤彌兵衛翁物語」の初上演。ウィーン在住のオーストリア公認国家ガイド・イップ常子さん、88歳にして旺盛な制作活動を続けておられる日本画家・舟木美代子さん、元タカラジェンヌとして新しいコミュニケーション文化に挑戦されている紫咲大佳（しざきひろか）さんなど、国内外で活躍されている女性たちによる講演が行われました。



村上淑子さんの琴演奏

14時、周藤彌兵衛翁像、ベルタ・フォン・ズットナー像、キルト作品「ゲルニカに会いたくて」が飾られた会場に琴の音が流れました。村上淑子さんによる「六段の調（しらべ）」と「千鳥の曲」の演奏で開幕です。
琴の余韻が漂うなか、正面スクリーンに、当研究所の基本的な考え方、1994年設立以来の活動の歩み、平和事業構想等を紹介する映像「混迷の時代 八雲立つ日本・出雲から陽が昇る」が映し出され、宇宙・地球・人類の誕生から始まる壮大なストーリーが展開されました。



小松昭夫代表の挨拶

これを受けて、はじめに主催の一般財団法人人間自然科学研究所、小松電機産業株式会社の小松昭夫代表が挨拶に立ち「happy gate
門番、クラウド総合水管理システムやくも水神という、空気と水の両方に関わる新しい産業、永遠の産業を、この地から生み出すことに成功しました。これに20年余にわたって積み重ねてきた研究所の活動を組み合わせ、新しい出発の時を迎えました」と宣言。
続いて、司会の八雲志人館・佐藤京子代表から、研究所より、島根・鳥取両県の公共図書館に、『天略―やくも立つ出雲から生まれた新たな「和」の経営理論』（早川和宏著）、『島根核発電所―原発その光と影』（山本謙著）、『悠久の河―周藤彌兵衛翁物語』（村尾靖子著）、『漫画・治水の英雄伝・周藤彌兵衛』（小室孝太郎著）、『安斎育郎のやさしい放射能教室』の5冊の書籍を贈呈することが発表されました。
女性陣による講演の一番手は紫咲大佳さん。宝塚歌劇団宙組に属し、男役として数多くの舞台に立った紫咲さん



紫咲大佳さんの講演



舟木美代子さんの講演



イップ常子さんの講演



朗読劇「悠久の河」（劇団幻影舞台）

続いて、松江市を拠点に活動を続けている劇団幻影舞台（清原眞主催）による朗読劇「悠久の河―周藤彌兵衛翁物語」が初上演されました。村人の反対、家族の死に苦悩しながら、56歳から97歳までかけて切通しを完成させた周藤翁の生涯を描いた作品で、翁の偉業と志が現代にのみ見えるのを目の当たりにするような迫力に満ちた舞台でした。
休憩をはさんで、日本ビジネスインテリジェンス協会理事長の中川十郎さん、出版社「幻冬舎」雑誌・広告本部雑誌局長の片山裕美さん、キルト作品「ゲルニカに会いたくて」の作者の創作キルト作家・内藤和美さん、スレドリングジャパン株式会社代表取締役・丸谷幸夫さん（紫咲さんのマネージャー）など遠方からお見えのお客様の紹介がありました。
最後に演壇に立ったのはイップ常子さん。広島市生まれのイップさんは、2001年に「オーストリア公認国家ガイド」の資格を取得。オーストリアと日本の懸け橋として、主に相互の文化交流イベントをはじめオーストリア国内、チェコ、ハンガリー、スロバキアなどの近隣国への観光案内・通訳に従事されています。
この日の演題は「ウィーン・ハプスブルグ家の女性たち」。1273年から第1次世界大戦終結の1918年まで645年間続いたハプスブルグ帝国の長い歴史の中から、イップさんは「素晴らしい生き方をされた女性」として、マリア・テレジア（1717〜1780年）、エリザベート（1837〜1898年）という二人の王妃を紹介。歴史の荒波に翻弄され、波乱に満ちた人生を凛として生き抜いた女性にまつわる、絵画や写真などふんだんな資料を駆使してのお話は、「女性が輝く時代」について、歴史



ワイン片手に談笑する舟木さんと小松代表

を振り返り、世界という視点で考えるヒントに満ちていました。
講演終了後は、コミュニケーション・タイム（交流会）に移りました。ワイン、ライスワイン（日本酒）を片手に、カナッペ、サンドイッチなどをおつまみに、くつろいだ雰囲気の中でコミュニケーションを深めてもらおうと、小松代表のアイデアで企画されたのもです。「ヨーロッパなどでは、正餐の前に、ワインと軽食を楽しむながらコミュニケーションを深めるウエルカムパーティが、その後の重要な相談事や取り決めに至るきっかけとして活かされています。共感のステージをととのえ、対立・統合・発展がスパイラル状に進化する『新しい和の文化』のプラットホームとして、ワイン・ライスワインによるコミュニケーション文化を創っていきたくと思っています」。